



松隈ファーム代表

松隈利生

佐賀県鳥栖市

1954年、佐賀県鳥栖市生まれ。ハム会社に就職後、23歳のときに父を亡くし、夫人とともに就農。28歳で母をも亡くし、農業経営者として自立を強いられる。父から受け継いだ2・8haの農地を10haに拡大することを目指し、40歳にして達成。現在、コメ15ha、麦14ha、大豆5ha、ジャガイモ4ha、ブルーベリー1600本（4軒共同）など。52歳で一歩退き、コメとジャガイモを次男に、ブルーベリーを夫人に任せる。自らは専業農家仲間とともに集落営農、JAに積極的に関わり、地域の農業の将来を担う存在に

新・農業経営者ルポ／第28回

専業農家仲間の未来のために、 集落営農をあえて担う

佐賀県の東端に位置する鳥栖市。九州を南北に結ぶJR鹿兒島本線と、東西に結ぶ長崎本線はJR鳥栖駅で交わる。九州縦貫・横断両自動車道が交わるのも巨大な鳥栖ジャンクション。福岡から長崎、熊本、鹿兒島方面に向かうためには必ず通過する物流の要衝だ。周辺には地の利を活かした工業団地も多い。

松隈ファームの松隈利生さんが農地をもつ高田町は、福岡県久留米市との県境近く。筑後川が作る筑紫平野にある。

「佐賀県と福岡県両方の業者が競ってくれるおかげで、農機も資材もほかの地域と比べて安いですよ」

周辺には、地元の農家の土地と久留米の地権者が持つ土地がモザイク状に混じり合う。そんな環境が松隈さん、および松隈さんが「仲間」と呼ぶ鳥栖の専業農家グループの視野を広げた一因だろう。

23歳で農業へ「転職」「10町作ろう」と決意

祖父の代から続く農地を、父から受け継いだのは確かだ。しかし、それは突然のことだった。

「あるハム会社に就職し、これから社会人として活躍しようという23歳の時、父が病気で倒れて亡くなりました。準備もなく急に農業を受け継

専業農家仲間の未来のために、集落営農をあえて担う



▲ポテトハーベスタTPH55（東洋農機）による収穫作業。作付面積拡大に合わせて今年もう1台購入予定

■集落営農をどうするか？ JAをどうするか？ いずれ崩壊していくのかもしれないが、地域の農業全体の未来を考えたとき、このまま放っておくと自らに火の粉が降りかかる可能性もある。佐賀県鳥栖市の松隈利生は、自力で経営できる元気な専業農家があえて積極的に関わることによってイニシアチブを握るべきだと達観し、行動を起こした。

ぐことになり、気持ちとしては「転職」でした」

すでに結婚していた松隈さんは夫人とともに会社勤めを辞めて就農。まさに人生の一大転機だ。

最初の1年は母から農業の手ほどきを受けながら、近所の農家からコメ作り、麦作りを学んだ。2年目からは1人でのチャレンジだ。

「受け継いだ農地は2町8反。自分なりに支出と収入、所得のバランスを計算し『10町は作らないと農家は

成り立たない』と採算ラインを設定しました」

農業初心者の夫婦が10haを作っていくには、どうすればいいか？すでにこの頃から「経営」の視点で将来的な規模拡大を見据えていた。1970年代半ばのことだ。

「まずやったのは、どの作業に何時間かかるかをすべて書き出すこと。しんどい作業を減らし、どうやって効率を上げるかを考えました。最もネックになったのは農薬散布の作業をいかに減らすか。すなわち雑草を生やさないということに行きつきます。防除がうまくいけば9割方、省力化は成功」

父を亡くして5年後、母も他界する。28歳にしていや応なしに農家として自立することを強いられた。

「初めは『鎌を持つ姿が似合わない農家』とよく言われましたよ。何しろ基礎をほとんど知りませんから」と笑う松隈さん。父から直接「農業」を受け継がなかったための苦労は大きい。しかし、だからこそ、その後の自由な「経営」が可能になったとも言える。

一人だけ若くして一本立ちした松隈さんも今やベテラン。周辺の元気な専業農家グループを率いる存在となっている。



▶カルビーポテトとの契約栽培によるジャガイモは3年目を迎え、さらに規模拡大を目指す

コメ・麦だけには頼れない 規模拡大を本格化

「両親を若くして亡くしたのは辛かったが、仕事の上での苦労はあまりありませんでした。コメと麦をまじめに作って農協に出荷していれば食える時代でしたから」

しかし、やがて「食えない」時代がやってきた。独自の目標「10町」を目指して徐々に規模拡大を続けてきた松隈さんの気持ちを後押ししたのは、コメ・麦に依存することへの

危機感だった。

「コメが余るようになり、美味しいコメしか売れません。コメどころだつて苦労しているぐらいです。佐賀のコメの商品価値についてはよくわかっていきます。効率化を進めながら、コメ・麦以外に広げていかないと生き残れません」

本格的に規模拡大に取り組み始めたのは1980年代半ばのこと。目標の10町をクリアしたのは90年代半ば、40歳の頃だ。現在は18ha程度に達している。

もつとも、規模拡大はすんなりいったわけではない。そもそも兼業農家はなかなか農地を貸したがらないものだ。周辺の専業農家仲間も同じ悩みを抱えていた。

「別の地域ですでに30ha以上借りていた先駆者的な方にこう助言されました——『貸しながらないとしたら、あなた方の借り方が悪い。貸す側にかかにメリットがあるかをPRしましたか？』」

仲間で協力して地域の青写真を描きながら、力を合わせて交渉に臨み、専業農家に預けることで土地が生き続けることをアピールした。

高田町には専業農家は4軒。周辺の藤木町、今泉町、真木町にそれぞれ1軒。

「仲間」の結束力は固い。農業や

肥料、資材を共同で購入し、農機を共同保有する。といっても、組織としての名前があるわけではないし、誰かがリーダーというわけでもない、緩やかなグループだ。

「例えば水田管理機は4軒で2台、大豆の刈り取り機は6軒で3台保有しています。それぞれ管理者は決まっていますが、1台が壊れても、適期を逃さずすぐ融通が利く状態です」

こうして紆余曲折を経ながらも規模の拡大、仲間同士の協力による経営の効率化を進めてきた。一方で取り組んできたのが、コメ・麦以外の作物による経営の安定化だ。

1作1000万円に目標設定 商品価値の高い作物を追求

「自分なりに有機農法で美味しいコメを作って自主販売し、1200〜1300万円を売り上げていたこともありました。しかしいったん台風にやられると、とたんに味が落ち、お客さんが離れてしまう。毎年お客さんを開拓しなければならぬようでは長続きしません」

といってもコメは作り続ける。「連作障害を防ぐために植える」という感覚だ。そして、「ヒノヒカリ」を作り、エコファーマー認証、残留農薬証明といった一通りの「安全・

松隈ファームの酒米、山田錦から生まれた天山酒造の純米酒「岩の蔵」。ただし家族は誰も酒を飲まない



安心」は押さえている。

さらに松隈さんが着目したのは餅米と酒米だ。酒米については地元蔵元、天山酒造との契約で「山田錦」を栽培。西海134号と松隈ファームの山田錦だけを使用した純米酒「岩の蔵」が発売されている。

麦についても四国の「もち麦」を栽培。コメ・麦ともに少しでも商品価値の高いものを作るよう務めてきた。

高田町の専業農家4軒で2001年から始めたのはブルーベリーだ。「町中は市の財源できれいになる一方、農村には下水処理場や廃棄物処分場が押しつけられる。そんな中、農家で人を雇うにあたって、なんとかイメージアップを図りたい。例えば地元の女性が活躍できるように作物を、と知恵を絞った結果、たどり着いたのがブルーベリーです」

一昨年からカルビーポテトとの契約によるジャガイモをスタート。



▶遠赤外線乾燥機（金子農機）。「コメは連作障害を防ぐために植える」という感覚だが、もちろん手を抜くわけではない

専門農家仲間の未来のために、集落営農をあえて担う

「まず台風シーズンを避けられますし、農機や施設への投資が大きいため、誰でも参入できるというわけではありません。だからこそ専門農家にはチャンスです。価格についても、安いけれども安定はしています。国際価格との差もそれほどなく、将来性もあると見ています。反収を上げるのも大切ですが、経費を引いていくら残るかに注目すると、ブルーベリーよりも割がいいんですよ」

「1作当たり1000万円」

その根拠は？

「キリがいいというのがありますが(笑) ジャガイモで1000万円は7haに当たります。それ以上作ると掘り取りが間に合わず、次の作物であるコメに支障をきたす。コメもあり作ると、麦の植え付けに響く…といった具合に、次の作物に迷惑をかける数字の目安が1000万円なんです」

麦は無理にせよ、コメではすでに達成済み。ジャガイモは2年目で650万円程度となっており、3年目には1000万円に乗せる見込みだ。

農家仲間の将来を見据え、集落営農とJAをあえて担う

前述の酒米の契約栽培にあたって



▶「仲間」で共有する農機も多い。ただしメンテナンス担当は1台ずつ決まっている

フルクローラトラクタ MKM75とコンバインVG65 (共に三菱農機)





15haの水田は23歳の次男、裕己さんの担当。23歳で父からバトンを渡された。夫人の寿子さんも子育てをしながら応援

▲次男、裕己さんは今年ゴボウにチャレンジする。父は一步下がって人脈面などで支援



J Aは「当初は見えて見ない振りをし、いざ出荷となると『検査をしない』と言いだした」という。

それから4年後の昨年、経営が厳しくなったJ Aが今度は頭を下げてきた。いわく「倉庫を使ってくれ」「共同乾燥機を使ってくれ」そして「集落営農を担ってくれ」。

すでに自主的に販路を開拓し、資材を安く調達し、乾燥調製施設も保有し、技術を自ら磨いている専業農家にとって、J Aに期待するものは何もない。

しかし、松隈さんら地域の専業農家の「仲間」はあえて火中の栗であるJ Aを拾う。それは、「集落営農」という一大ムーブメントの中で専業農家がイニシアチブを握り、地域の、ひいては自らの農業を守っていくためだ。

「集落営農は農地解放以来の一大事だと私は思っています。結局は専業農家が、兼業農家の耕地の分をほとんどタダ働きで管理するようなシステムで、一見、専業農家には何のメリットもありません」

しかし、実際は専業農家の未来にも大きな影響を及ぼす。

「仮に放っておいて、農地がすべて集落営農でカバーされてしまうと規模拡大が不可能になってしまう。集落営農に参加すれば、例えばジャガイモに適した農地をまとめるといったこともできますし、コメ・麦から野菜への移行も効率的にできる。専業農家がノウハウを結集して率いてこそ、うまくいく」

松隈さんは当初躊躇していた仲間全員に声を掛けた。

「かたらんね」—— 佐賀の言葉で「参加しようよ」。

「専業農家が生き残るためには、はつきり言って、兼業農家の農地を受け継いでいくしかありません。そのリレーをスムーズにするために、50

専業農家仲間の未来のために、集落営農をあえて担う

a だけ集落営農に預けて、兼業農家のために働いてもいいじゃないですか」

専業農家仲間は今やJAの共同乾燥機や倉庫を、そして地域の農地の未来を委ねられようとしている。これはあくまで、元氣な専業農家がリーダーシップを発揮している一地域（JAさが東部鳥栖支所）でのことではあるが、その試みは全国から注目されている。

52歳で「引退」し、家族で裁量を分担。「人を雇う農業」を時代に託す

「私はもう引退したんですよ」



▲「トスベリーファーム」で栽培しているブルーベリー。マーケティングを基にした商品開発・販売は着実に成果を上げている

松隈さんは笑う。

もちろん「引退」は言葉のイヤ。実際は家族間で役割を分担し、従来すべてを管理していた松隈さんは一歩下がって、麦と大豆の担当になったのだ。

就農当初から苦楽を共にする夫人・信子さんにはブルーベリー園「トスベリーファーム」を任せている。高田町の4軒の専業農家で1600本。生食用、ジャム用、ジュース用、ケーキのトッピング用など用途に合わせた品種・クオリティのブルーベリーを栽培・販売する。後継者となる次男の裕己さんにはコメとジャガイモを任せた。

「私は52歳で引退するつもりでした。親父が亡くなった歳と同じです。それが今年なんです」

これも巡り合わせなのだろうか、くしくも裕己さんは23歳——松隈さんが亡き父から農業を受け継いだ歳だ。女の子をもうけ、奥さんの寿子さんも「農家のお嫁さん」として子育てをしながら農作業に携わる。

水田担当の裕己さんは来年ゴボウにチャレンジする。これは彼自身の判断だ。

「ゴボウの天敵はセンチュウ。水田にはセンチュウはいません。また、阿蘇などの火山灰土壌には向いていないため、競争力があります。もう売り先は見つけたから、あとは作るだけだと本人は言ってます（笑）」
近々、鹿児島や熊本の産地へ成功事例、失敗事例を学びに出かける。こうした際のツテ探しについては、



長田 幸康

【筆者プロフィール】
1965年愛知県生まれ。フリーライター。専門分野はチベット・ヒマラヤと環境問題。年に1度はチベットに通う。著書に『知識ゼロからの仏教入門』（幻冬舎）、『チベットで食べる・買う』（祥伝社黄金文庫）、『旅行人ノート チベット』（旅行人）など。
ホームページ：<http://www.tibet.to/>

各地の生産者に顔の広い松隈さんがサポートを惜しまない。

「私の経営はあくまで私の世代のもの。家族労働の時代の経営です。次の世代は人を雇っていく時代になるんでしょね。その時代に合った自分なりの農業、経営を確立してほしい」

農業において最も大切にしていることは？

その問いに松隈さんは自信に満ちた口調でこう答えた。

「仲間です。自分ひとりで大きくなっても、つまらない。まわりであれこれ騒ぐ人が多いほど、地域全体も盛り上がるし、個人としてのやりがいもある」

松隈家の農業から一歩身を引く。それは、もっと広い視野から地域を見渡し、盛り上げていこうという布石なのかもしれない。